

山と博物館

第49巻 第12号 2004年12月25日

市立大町山岳博物館

ニホンカモシカの名前を募集します

大町山岳博物館

大町山岳博物館の付属園では、今年五月十二日、三十一日と相ついでニホンカモシカの赤ちゃんが産まれ、人工ほ乳で育てました。離乳後は干し草や野菜をモリモリと食べて大きく育っています。生後半年を過ぎて体調も安定してきましたので、二頭の赤ちゃんカモシカの名前をみなさんから募集します。

パツと思ひ浮んだ名前、顔を見て思いついた名前、自分の夢・希望やカモシカへの想いをたくした名前など……。いつまでも心に残る素敵な名前をつけてもらいたいと思います。

なお、応募方法や締切などについては本誌四ページ末にありますので、そちらをご覧ください。みなさんからのたくさんのご応募をお待ちしています。



今年5月に産まれた2頭のカモシカ(左が12日、右が31日生まれのメス)

- 「赤ちゃんカモシカたちのデータ」
- 平成16年5月12日生まれ メス(写真左)
 - ・両親 父親：クロ
 - ・母親 父親：クロ
 - ・兄弟 五十鈴(平成13年生まれ・オス) ……現在、石川県森林公園で飼育
 - 岳がく (平成14年生まれ・メス) ……現在、富山市ファミリーパークで飼育
 - (平成15年生まれ・オス) ……現在、盛岡市動物公園で飼育
 - 平成16年5月31日生まれ メス(写真右)
 - ・両親 父親：シロ
 - ・母親：マヤ (この両親の10頭目の子どもになります)

千国古道と糸魚川街道

歴史の道の呼称のあり方(後)

小林 茂 喜

四 文献に見られる近世の「塩の道」の呼称

(一)千曲の真砂

「千曲の真砂」は、宝暦三年(一七五三)、瀬下敬忠によって表された信濃の歴史・地理書である。その巻九には松本から各地に至る道の道法と主な通過地が記されているが、松本から糸魚川に至る道は次のように記されている。

松本より仁科・大町を経て、越後頸城郡糸魚川江出る千国通りの道

として、その通過地は

松本→熊倉橋→成相新田→穂高→青木新田→池田→大町→海ノ口→中綱→青木→佐野→沢渡→飯田→塩島新田→千国→宮本→石坂→来馬→大綱→白池

とし、白池からは「越後国頸城郡」であると述べている。また青海へ出る道として

大綱橋場→山の坊→小滝→青海

とある。ここで、「千国通りの道」とことさらに上げていることは注目し得る。千国は松本から糸魚川へ行く場合に必ず通過する地点(宿場)であるが、単に通過点としての意味ではなく千国を他の宿場と区別する意識が働いたものと考えられる。しかしあくまでも「千国通りの道」であって、千国道ではないというところがそれ以上に重要である。つまり千国を特別に意識しながらも、この時点では最早「千国道」と表現したのではどこかに違和感が生まれるような実情になっていたということである。

(二)善光寺道名所図絵

「善光寺道名所図絵」は、美濃の人豊田利忠に

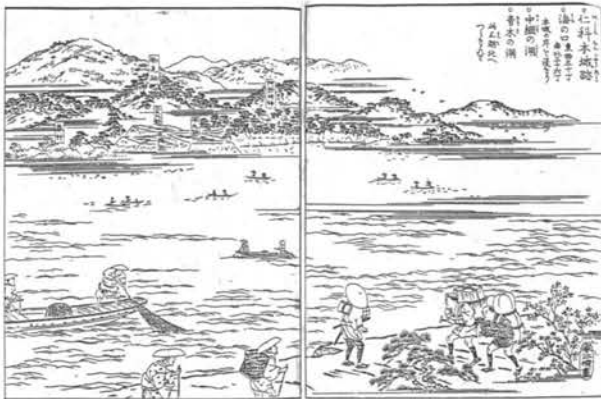
よって、天保一四年(一八四四)に記された旅行案内である。この「名所図絵」は巻之一で

穂高に降りて貝梅村の乳川を渉り、孤島にて高瀬川を越し、十日市場・洪田見・滝沢・林中等を過て池田宿に至る、是を仁科街道といふ

と記している。また

仁科街道なり

とも記している。他の記述を見ても、名所図絵が当時の人々の呼び方に従っていたことは明らかであり、それからすると、当時南安曇の北部や北安曇の南部では「仁科街道」のように呼び習



明らかに湖の東側を通過している糸魚川街道

わされていたことを確認することができる。

(三)善光寺道統膝栗毛

善光寺道中膝栗毛は正確には「従木曾路至善光寺道統膝栗毛」という。言うまでもなく十返舎一九によってやはり天保年間に記されたものである。

この「統膝栗毛」はその九編上で池田・大町付近のことに触れているが、

松本より善光寺へ、近道と聞ききたる、糸魚川街道に出、池田の駅に一宿し

と明確に「糸魚川街道」を使っている。庶民の旅が盛んになったこの時代に、人々が松本から糸魚川への道を「糸魚川街道」と呼んでいたことは確かであり、かつ重要な事実である。

(四)信府統記

「信府統記」はその巻之二で交通や境界について触れ、大綱橋の項で次のように述べている。

此川(姫川)二信濃ノ地ヨリ越後ノ地へ渡ス橋ヲ大綱橋ト云フ是信濃ノ国ヨリ北国往還ナル故松本領ニ架スル橋ナレバ 云々

ここで「信濃国ヨリ北国往還ナル故」といつているのは、「北国往還」を固有名詞として使っているのではなく一般名詞として「北国」との往還(街道)なのでと云う意味合いで使っていると思われるが、いずれにせよこの越後糸魚川への道は、信濃から北国へ行く往還の一つとして教えられていた訳であり、つまり信濃と北国が起点と終点として強く意識されている。別な云い方をすれば通過点である仁科(大町)も千国もはるか背景に退いて意識されていないと云えば良いであろうか。そしてその少し後段で

○ 松本ヨリ山中通り糸魚川へノ道程

としてその道のりを述べている。ここでは通過点も千国ではなく「山中(小谷のこと)」であり、千国に特別な関心は払われていない。

以上の経過を見ると、江戸時代の文献の上では時代が下がるにつれて、千国というのは

印象が薄くなり、次第に使われなくなっていくと言えそうである。

(五)残された道標から

道標は極めて重要な道の呼称の史料である。そして当然のことながら道標は目的地を記して道の名を明らかにした。例えば現美麻村湯ノ海

に記されている寛政一一年(一七九九)の道標は「右善光寺道 左戸隠山道」のように記されている。戸隠への道はここから山腹を縫うように藤

集落へ出、いったん青具の谷へ下った後再び尾根へ上り、なだらかな尾根道を戸隠方面へとゆるやかに上っていく道である。近世には数戸程の小集落が道に沿って点在していた様子で、まさに「山道」と言うにふさわしい。

この道標から手前、現「向口」(なごん原)には天保一一年(一八四〇)の道標があり、ここには「左せんく、ハうし・と介久し、右大しほ」と刻まれている。大町から善光寺に至る道筋は「統膝栗毛」に明らかなように他にも幾筋かあるが、ここを通る道が善光寺道と呼ばれていたことは確かである。

さて目を大町から北へ向かう道に転じてみるとどうであろうか。大町に新町(あらまち)が形成されてからの善光寺道との分岐点はその名の通り大黒町の追分である。その追分にある道標は延享三年(一七四六)のものであるが、この道標には

右善光寺道・左越後道

のように刻まれている。則ち当時の人々は「越後道」と呼び慣わしていたわけである。正徳二年(一七一二)から延享三年に至る大町組駄賃書上帳でも、表紙に明確に

越後道筋駄賃書上帳

とあり、冒頭に「越後道筋駄賃之覚」と記されていることから人々が「越後道」と呼んでいたことは確かである。もう一つの道標について触れておかなければ

は明確に区別して考えられなければならないということがある。

六 研究論文における街道呼称

最後に研究者は是をどのように呼んできたか見ておきたい。

研究論文の総てに当たることはとてもできないので「信濃」に掲載された論文を中心に検討してみた。その二、三を紹介しておきたい。

結論を先に言うと、これも筆者の見落としていないならばと言う前提に立つての話であるが、極最近の論文をのぞき、「千国街道」と呼んでいるものは一つもない。例えば昭和一七年（一九四二）の七月十月号（第二次「信濃」江口善次論文「信越の交通路についての考察」では、最初の方で姫川の渓谷に沿ふた糸魚川街道又は千国通りとし、文中では

北安曇郡には糸魚川街道、上水内郡には北国街道があるのみで
糸魚川街道と言う呼称をより公式的なものとして用いている。

昭和三十年の七巻（一〇・一一）小穴芳實論文「信州安曇郡成相・新田両宿の成立とその発展」でも「糸魚川街道」である。

南安曇郡誌他各市町村史とも正式呼称として

は「糸魚川街道」を用いており「大町街道・松本街道・仁科街道・千国街道ともよばれた」と併記しているものもある。

糸魚川街道を用いるのは明治になってから（二年）糸魚川街道という名称が正式に採用されたことよってであり、その道筋はおおむね近世の道筋であったからである。

昭和四二年に編纂された東筑摩郡塩尻・松本市史では、西五千石街道を北に波田から安曇へと向かう道を「千国街道」と呼ばれたと記している。これは古代の千国古道の道筋であり、この事実が示しているように、近世までのいわゆる千国道と近世の糸魚川への道とは基本的な違いがあることを改めて確認しておかなければならない。

おわりに

歴史の道呼称のあり方

さて、今まで見てきたことの要点をまとめてみると次のようになる。

- ①糸魚川と南安曇・松本を結ぶ道は古代から近世初頭までは「くみにち」と呼ばれていた。
- ②近世の千国道は古い千国道の道筋を引き継いでいるが、古い千国道と近世の糸魚川

への道は特に大町以南で基本的に道筋が異なっている。

③近世の糸魚川への道は近世には「越後道・仁科街道・越州往還」「糸魚川街道」と呼ばれた記録は残るが、千国街道と呼ばれた記録は見当たらない。

④昭和初年の「北安曇郡郷土誌稿」には、小谷地方で「千国街道」の様に呼ぶこともあったことを記している。

⑤近代になって正式に糸魚川街道とよばれるようになり、そのことから論文においては近世の道についても「糸魚川街道」の呼称を用いている。

以上に見たことから、私は「千国街道塩の道」の様に表記することは歴史的には誤っていると考える。塩が頻りに運ばれたのは正しくは「越後道」であり、「越州往還」であり、あえて街道と冠するならば「糸魚川街道」であった。それが小谷など一部の地域で千国街道とも呼ばれただけのことである。従って千国街道が全体の正式呼称の様に扱われるのは正しくない。

千国街道の呼称が頻りに使われるようになってくるのは昭和五十年代に入ってからであり、古道・地方文化等を取りあげた書籍や観光パンフレットにおいてである。そこには、「千国道」という古道への懐旧を、塩と近世の街道と結び付けた「命名者の知恵」が働いている様に思われる。人々は糸魚川街道という生々しい流通の道・経済の道よりは、牛方達が細々と塩を運んだロマンの道に心を癒そうとしたのであろう。

そして観光宣伝の「千国街道」が瞬間に広まり定着してしまった。今日ではあたかも千国街道こそが正しい呼称であるかのように、さまざまな論文もこれを使用し、糸魚川街道という呼称はむしろ忘れ去られようとしている。

しかし既に見たように、歴史的には、近世において千国街道と呼ばれた痕跡は小谷地域にわずかに残るのみであり、大町以南においては、古代・中世の千国道と近世の糸魚川街道を分け

て考えなければならない。また街道呼称が生まれてくるのは近世であり、その近世に於ては、いわゆる糸魚川街道の起点と終点は糸魚川と松本であった。従って近世以前の「千国道」を「千国街道」の様に言うことは勿論正しくなく、また近世の松本糸魚川間の道は、当時の人々が呼んだように「越後道」「越州往還」「糸魚川往還（街道）」と呼ぶのが正しい。

大町市等が行っている「塩の道祭」は、一部例えば西海ノ口で近世以前の「千国道」を通りながら、それを近世の街道として「千国街道」としており、二重の間違いを犯している。先に見たように、近世の街道は木崎湖の東を通っていたからである。古い道の雰囲気は確かに西海ノ口を通る道の方にあるが、それを「千国街道」と記すのは明らかな間違いである。

筆者は今まで見たような実情から、この地方を南北に縦断する幹線道路を、近世初頭までは「千国道」と呼び、近世においては「糸魚川街道」と呼ぶことが正しいと考える。

筆者の検討の及ばないところで「千国街道」の様に呼ぶのが正しいという史料や根拠を御持ちの方がおられたら、是非御教示頂ければ幸いです（おわり）

（信濃史学会員）

◆「カモシカの名前」応募方法

はがきに住所・氏名・電話番号、カモシカの名前を（頭につきひとつ書き、当館まで郵送してください。締切は来年一月十一日（消印有効）。なお、決定した名前には本誌や当館HP、地元新聞や市役所広報等で発表します。

山と博物館 第49巻 第12号

発行 千0002 二〇〇四年十二月二十五日発行
市長野原大町市大字大町八〇五六一

市立大町山岳博物館
TEL 〇二六―二二〇二二
FAX 〇二六―二二〇二二
E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/

印刷 株式会社印刷
定価 年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号 〇〇五四〇七一三三九三

